

恩師 中村瑞隆先生を偲んで

田 賀 龍 彦

先生にはじめてお目にかかったのは昭和二十二年、大学に入学した時であった。先生は三十代前半のお年だったと思う。それ以来、五十余年に亘ってご教導をいただいてきた。

大学の効用の一つは、終生の師とするに足る人を得ることだといわれる。その点からいうと、私は大変幸運であった。当時は戦後間もない貧しい混乱の時代であった。すべての価値が逆転し、誰もが自信を失った荒廢の時期でもあった。

入学当時、私は十六才であったが、それ以来今日まで、いくらかでも社会のお役にたつことができたとすれば、それは先生に負うところが大きいと思う。大学、大学院から大学に奉職して、先生のご教導にあずかる機会が多かった。学問ばかりでなく、私の人間形成にも大きな影響を与えていただいた。当時は給与の遅配欠配があったが、よく先生のお宅に伺っては奥様にも大変なご迷惑をおかけしたことだろうと思う。よく泊めていただいて先生のベッドを占領してしまったことも再々であった。思い起すと、先生との思い出は数限りなくある。

先生は右手が不自由で、左手ですばらしい書をよくされた。先生は常にダブルの上着の下に右手を入れておられたが、そのお姿が目には浮ぶ。先生は日本学術会議の会員も務められ、定年直前には立正大学長も務められた。当時、私

は常務理事として先生の日常をおそばで見っていたが、大変なご苦勞をおかけしたことを申し訳なく思っている。先生にとつてはこのような俗事はかえってご迷惑なことだったのではないか、静かな学生生活を望まれていた先生にとつては煩わしさ以外の何ものでもなかったように思う。定年後は静かな生活にもどられて、法華經の研究に余生を過されておられた。先生の定年後は、東京を離れておられることも多く、私自身多忙なためもあって、お目にかかる機会が少なかったが、私にとつては先生がおられるだけで何ものにもかえ難く心強いことであつた。今、先生の声咳に接することができないと思うと、胸に大きな穴があいてしまったような感じがする。先生はご遺言によつて、ご親族だけで通夜葬儀を執り行なわれ、大学の学園葬も辞退された。先生は日蓮宗の僧侶であり、曾て寺院の住職をされたこともあつたが、このようなご遺言をされたお氣持は私にはわかる氣がする。先生はご自身で法号を「求道院巡歴瑞隆日邦法師」とされて遺された。形式的にはこれでは困るのであるが、先生はその生涯を法華經に捧げられ、法華經にいう「法師」(dharma-bhāṅka)であるというお考えからであつたものであり、私どもにも、いかにあるべきかを示されたものと思う。私は不肖の弟子で常にご心配をおかけしてきたが、又いつの世にか先生の顔貌を拝して、ご教導にあらずかりたいと心から願うものである。

(立正大学名誉教授)